

言語教育情報研究科 20周年記念企画

修了生シンポジウム「教育から学びへ：これまでの外国語教育とこれから―立命館大学プロジェクト発信型英語プログラムと立命館アジア太平洋大学・日本語プログラムの実践から―」

司会：平田 裕 教授

i) 日本語教育学プログラム修了生

APU 日本語教育の3 ミッション（稲田 栄一・寺嶋 弘道）

ii) 英語教育学プログラム・言語情報コミュニケーションコース修了生

BKC 英語教育: AI 時代の英語教育の可能性（木村 修平・近藤 雪絵・山下 美朋）

iii) 総合討議

稲田栄一先生

おはようございます。言語研 14 期生、2018 年に修了致しました稲田栄一と申します。本日はどうぞ宜しくお願い致します。本日は私が日本語教育の中で実践した日本語中上級クラスに向けて実践した「作文を活用した読解活動の実践と今後の AI に絡めた展望」についてお話ししたいと思います。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は現在、関西学院大学の国際学部で主に留学生に対して日本語を教えております。大学院に入る前もずっと日本語教師をしておりまして、2016 年に言語研で学びまして、2018 年に修了し、その後、立命館アジア太平洋大学の言語教育センターに勤めておりました。そして、現在は関西学院大学に今年の 4 月から移っております。今回、APU の日本語教育実践に関わる話をさせていただくということで、APU にいた期間が長かった私が、このような発表の機会をいただくことになりました。よろしくお願ひします。

APU の目指す日本語教育というものがあまして、それと本日の発表の内容について絡めた話をしたいと思います。ご存知の方も多いと思いますが簡単に紹介しますと、立命館アジア太平洋大学は大分県別府市にありまして、2000 年に設立され、今年の 4 月にサステイナビリティ観光学部という新しい学部ができて、現在 3 つの学部で構成されています。学生数が 5500 人、そのうち約 40%が海外からの国際学生ということで、非常に多文化・多国籍な環境で教育を行っているというところです。

その中に APU の日本語教育があるんですけど、これは言語教育センターですね。この後ご発表される寺嶋先生も所属されている言語教育センター（The Center for Language Education）、英語の頭文字を取って CLE が担当しています。CLE ではゼロ初級の学生から上級相当の学生までの日本語教育を担当しています。ゼロレベルがだいたい 55% くらいで、中級までが必修で、それ以降中上級以降が選択クラスで、毎学期 1200 人程度の受講生と現在は教師が 35 名いらっしゃるということです。

APU の目的、ミッションがあるわけですが、それは 2030 年に向けた APU のビジョンがありまして、APU で学んだ人たちが社会を変えていこうという、そういった人材を育成しようということで今動いています。その中にある CLE のミッション、日本語教育プログラムのミッションがあります。それがこちらの CLE のミッションで、主に 3 つの大きな目標がありまして、その一つ目が言語運用力、それから異文化間能力、そして自律学習能力を育成するということで教育を行っています。その中であって、私とそのミッションの達成に向かって行った活動が、本日ご紹介する活動です。

それが、こちらの「中上級クラスでの作文を活用した読解活動」ということで、端的に申しますと「学生が授業内に書いた作文を、読解教材として利用できるのではないか」というもので、それを次々と読み進めていきながら、作文を学びつつ、読解も学ぶというようなことです。こちらの狙いとしては、授業内で行った作文・記述指導や読解活動で読解を読み進めることが言語運用能力を養うことになるだろうということ、そして、クラスメートの作文を読んでそこから気づきがあったり、何か自分に対する考えが変わるのではないかということで、異文化間能力の育成、そこからの気づきより、自分の学習のことや大学生活の省察が行われるのではないかということで自律学習能力を促進できるのではないかというもので、CLE ミッションとも深く関わるのではないかということから始めました。

どうしてこのような活動を始めようかしたかという背景なんですけれども、日本語を教えていく中で、初級・中級・中上級とどんどんレベルが上がっていくにつれて、主に非漢字圏の学生が多いんですけど、長文の読解を諦めてしまう、はなから読まないっていうような学生がどうしても出てきまして、それは学生の責任だけなのかと考えたときに、教科書を教えるとか、勉強するために読み物を読むというような指導におわれ、興味を持って内容を理解しながら読むというような、読解の本質を学生が意識しないまま教育が進められていたんじゃないかという私自身の反省もありまして。ならば学生が萎縮せずに、楽しみながら読むような仕掛けが必要だなということでこのような活動をしました。

もう一つの狙いとしては、同じ日本語レベルの学生が書いた作文なので、当然のことながら特別難しい作文とか簡単すぎる作文ではないので、レベル的にも読みやすい、そして内容的にもクラスメートが書いたものだということで興味を引くものなので、読解を楽しみながら読むということができないのではないかということから始めました。

対象クラスは、私が昨年の春学期に APU で担当した日本語中上級クラスの受講生です。授業内の 3 回の授業でこちらの活動を行いました。まず事前の準備として APU のコース内に沿った作文指導がありまして、その作文指導をまず行いました。このテーマが、「私が日本の大学に入った一番の理由」ということで、作文を書いてもらって、こちらを私がチェックをして、そしてフィードバックをしてリライトをしてもらいながら、学生が作文を完成させました。その完成した作文を、クラス内の LMS です、当時 manaba を使ってたんですけど、その掲示板に投稿してクラス全体で見られるように共有しました。

そして授業の中で、もちろん活動の目的とか、そのルールなどを説明しつつ、学生が興味を持ちながら、次々に作文を読んでもらうということで、どんどん読んでもらいました。読み終わったら、その中から特に興味を持ったものを選んでその理由、感想、それから要約もちょっとしてもらおうということで、要約、それから書き手へのコメントなどを記載したレポートを作ってもらいました。

その後、3 名から 4 名のグループに分かれ、どうしてその作文が面白いと思ったかっていうようなことを話し合う時間を設けました。先ほどの活動のレポートと、あと授業後に振り返りシートも自由記述で「この活動がどうだったか」ということも書いてもらいました。その読解のレポートと振り返りシートを見ながら、この活動にどのような効果があったかっていうのを探りました。

こちらは学生が書き手に書いたコメントですね。読者が書いたコメントは、作文を書いた本人にも返却して、こういうコメントがあったよっていうのを見てもらいました。活動のレポートはこのようなものですね。活動レポートの学生が書いた記述を見ると、次のようなことがわかりました。これちょっと長いので一つ一つご紹介はできないので、かいつまんでご説明したいと思います。

まず、クラスメートの作文、つまりこの読み物から学生の「内省が進んだ」という記述や、あと「自分の中で気づきが得られた」というような記述、それから「共感があった」という記述、それから「今後のあり方を思慮する」というようなコメントがありまして、学生の考え方に何らかの刺激を与える活動になったのではないかなというふうな手応えを感じました。

また、振り返りシートからこの活動の良かった点としてこのような記述がありまして「クラスメートが書いた作文なので興味をそそる」、しかも日本に来た理由ということで、「どういふ理由があつて来たのか、自分と何が違うのか」というようなことが書かれてあつ

たので「面白く読めた」ということ。それから、これも狙いどおりのコメントかなと思うんですけど、「レベルが自分に適していたので読みやすかった」ということで、「読解への取り組みが意欲的になった」というコメントがありました。また、「この活動を通じて、新たな表現、語彙とか文法とか作文構成が学べた」というような感想もありました。それから振り返りシートの記述から、この活動が「作文における動機付けがある」ということがわかりました。読解活動なんですけど、やはりクラスメートに読んでもらうというところで、自分が良い作文を書きたいという気持ちから、作文における動機づけという面でも効果があったと言えます。

一方の困難としては、一部の学生ではありましたが「難しかった」という意見がありました。「漢字がわからない」とか、「作文の内容がわからなかった」という意見があったので、これは授業の中で個別対応するよりは、どうすればうまく読み進めることができるのかとか、どうすれば相手に伝わる作文になるかというのを学生と一緒に考えていくことが必要なかなというふうに考えています。

まとめると、読解に関する学びがあるだけではなく、学生の学習に対する内省を促進するとか、作文や動機づけの効果があるということで、これが APU の CLE ミッションである言語運用能力、異文化間能力、それから自律学習能力を育成するための一助になるのではないかなと思います。これをもっと効果的な活動にするには、1 回の活動で終わるのではなく、コース内の他の作文や読解の指導とうまく連動できればいいかなと思っています。

最後になりますが、今後の展望としまして生成 AI でこの活動がどのようにブラッシュアップできるかなという考えについてお話しします。学生が自分で書いた作文を読み物として使うのであれば、やはり読み物としてもっとブラッシュアップしたいと学生が考えるんじゃないかなというところで、学生自身が書いた表現と生成 AI によるフィードバックから、もっといい作文にするというようなことができるんじゃないか。それを学生が最初に書いた作文と、生成 AI によるフィードバックで何が違うかっていう考えるきっかけ作りができるんじゃないかと思います。これはこの後お話される寺嶋先生と私とあと APU の先生と一緒に研究した一つの結果なんですけど、学生が書いた作文に ChatGPT によってフィードバックをさせるとこのようにいろんな変化がありましたよってということが示されています。語用についてのフィードバックや内容についての問いかけが ChatGPT によって可能なので、このように生成 AI をうまく利用することで学生がもっとクラスメートに読ませたい作文に近づけられるのではないかと思います。

学生が教師の手を離れて自分が読ませたいものを書くというふうに考えが変わってくれば、教師の手を離れて、学生が自発的に書きたい、読みたいというふうになれば、最初に私が根本的課題として思っていた読解を諦めてしまう学生がいるという問題の突破口になるの

ではないかなと考えています。以上の考えから、この活動をもっと続けていきたいなというふうに思っております。これで私の発表を終わりたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

寺嶋弘道先生

それでは始めさせていただきます。私は2期生で寺嶋弘道と申します。どうぞよろしくお願いたします。本日は最初に自立学習能力とコーパスツールの活用についてお話しした後に、先ほど稲田が説明したCLEミッションをどのように実践しているかというのを、私が担当している漢字語彙スキルアップというコースを例にご紹介していきたいと思います。

こちらは私の自己紹介です。今APUに着任して18年目になります。そして今は日本語プログラムの主任をしております。これまで本学で漢字語彙教育のシラバスとか教材を作成してきました。私に関心のあるテーマは、コーパスツールとかChatGPTをライティングに活用するという事です。最近は学習者の自律性を引き出すような言語アドバイジング、そういったものにも関心があります。

最初に自律学習能力についてです。私たちがミッションにおいて自律学習能力を重視しているのは、まずコース内容の学びに限界があるからです。つまり、時間に限りがあるので限界があるということです。そして学習者のニーズとか興味の違い、そして能力とか学習方法の違いなどがあったりして、学習者の自律学習能力を引き出すことが必要だと考えております。また、APUでは学んだ人たちが世界を変えろとっていますが、実際に学習者が現実の世界で直面にするような課題に対応して生きていく力を獲得してほしいというのも理由の一つです。

自律学習能力を養うためにどうしたらいいのかということですが、2つのポイントがあるんじゃないかなというふうに考えています。1つは教員の役割を見直すということです。先生が全てを決めるのではなくて、先生と学習者が一緒に決めたりとか、あるいは学習者自身に決めてもらうという、学習者の自己決定型学習ですね。こういった割合というのをどんどん増やしていく必要があるんじゃないかというふうに考えています。そしてもう1つは、学びそのものを捉え直すということです。学びを捉え直すときに私たちが参考の一つにしているのが、フィンクが提唱している意義のある学習というものです。

一般的に言語の授業って言うと、語彙とか文法を覚えて、それを使ってみるという授業をイメージすると思うんですけど、私たちが目指していることは、統合とか人間の特性とか、関心を向けるとか、学び方を学ぶといった領域まで学びを広げていくということを目指しております。特にこの統合とか関心を向けるとか学び方を学ぶっていうのは、自律学習を養うために必要な領域だと考えています。

続いてコーパスツールについてです。のちほど紹介するコースで使っているのので、ここで先に紹介いたします。コーパスツールっていうと色々な機能があるんですけど、私が授業で紹介しているものは、レキシカルプロファイリングという機能を持ったコーパスツールです。これは文法パターンごとでコロケーションを示すことができる、統計値を出して示すことができるツールです。コーパスツールにはいろいろなメリットがあると考えているんですけど、最終的にはコーパスツールの使い方を学ぶことで、学習者の自律学習能力の向上につながるんじゃないかというふうに考えております。

一方で、実はコーパスツールは日本語教育であまりまだ浸透していないような状況かなというふうに考えているんですけども、その背景にはコーパスツールの活用の難しさというのがあります。日本語の場合はやはりコーパスツールはオーセンティックなものなので、漢字語彙が読めない、意味が分からないということが多々起こります。学習者の場合はいつも辞書にコピーペーストして意味を調べるみたいな使い方になってしまいます。また、実際に学習者からの声を聴くと、コーパスツールで使用されている文法用語みたいなものが聞きなれないから、よくわからないという声もよく聞きます。そしてもう1つが、ライティング時に文脈にあう言葉をピンポイントで探すのが難しく、時間もかかるということも、実際に実験してみるとよくわかります。例えば良いリーダーはチームの目標を決めて、メンバーを引っ張っていく、と言う文章を作っていきます。「引っ張っていく」みたいな言葉をコーパスツールで探すときにすぐに出てくるかというのと出てこないですね。コーパスツールを使ってすぐに自分が探したいコロケーションが見つけれられるかというのと、必ずしもそうではなくて、そういったことからコーパスツールを効果的に使えないとか、効率的に使えないみたいなことを感じる学習者や教員が多いのかなというふうに考えています。

そこで、私は共同研究者といっしょにライティングにおけるコーパスツール活用モデルというものを提案しました。これは何かというと、コーパスツールを活用する際にコピーペーストしなくてもいいように、ツール内でポップアップするような辞書をまず使いましょうということです。そしてライティングをする前に、テーマに関連する知識とか、テーマに関する

語彙とかコロケーションを語彙ネットワークとして整理する。そして語彙ネットワークとして整理したのから短文を作って、短文から作文に発展させるというものです。このモデルでは、この3つの段階でポップアップ辞書とコーパスツールを使いましょうということを提案しています。

こちらがこのモデルを使ってみた結果なんですけれども、これは3人の学習者が3回作文を書いて、どうだったかっていう結果を表したものです。このグラフはコーパスツールで探したコロケーションとか、作文の中で何回使われたかということを示しています。この色違いのものは3名の学習者ということです。一番左側は語彙ネットワークでコロケーションを探して短文にを使って、短文からさらに作文に使ったものです。そしてこれは語彙ネットワークで書いたものを短文を介さずに作文に直接使ったもの、そして短文・作文というのは、短文で初めてコーパスツールを使って調べて作文に使ったもの、そして作文は作文時にコーパスツールを使ったものになります。一般的にコーパスツールをライティングで使いましょうという作文時にコーパスツールを使うというスタイルなんですけれども、このモデルでは様々な方法でコーパスツールを使って、コーパスツールの使用回数というのも増えたということがわかりました。

次に私が担当している漢字語彙スキルアップの取り組みをご紹介します。私たちのコースでは基本的にシラバスを書くときに、日本語運用、そして自律学習能力、異文化間能力の中でのどのような目標があるかということを書き記述しています。この私が担当している漢字語彙スキルアップではこのような目標を立てています。

日本語運用能力では漢字の読み方がもちろんわかって、意味がわかって、それが実際に運用できる、あるいは、知っている漢字から推測できるというのが、コースの目標となっております。異文化間能力は、大小いろいろなタスクがあるんですけど、その目標に向けて、他者とうまく協働してお互いの学びを深められる、というのが目標です。自律学習能力は関心のあるトピックでよく使用される漢字語彙を調べて、運用とか自分の学びを批判的に考えて改善するというものです。こちらはこのコースで実際に扱っているトピックになります。このコースの特徴なんですけれども、まずコーパスツールを使っているということが特徴としてあります。導入はこちらの教材を使って先ほどのモデルを導入しています。そしてもう1つは、この5課のところで活動として学習者によるミニレッスンというのをやっているということです。これは学習者が自分たちだけでなく、クラスメートにも関心のあるテーマを設定して、クラスメートに対してミニレッスンを行うというものです。

これが実際に学習者がグループで作成したものになります。この内容ですけれども、このグループはコンサートの予約というテーマで作成しました。発表者はこういう関連のウェブサイトを観察・分析して、こういう漢字語彙リストを作成しております。この漢字語彙リストの中には、実際に漢字語彙だけじゃなくて用例も書いてもらって、そして会話文を作ってもらっています。こういった用例とか会話文を作る時にコーパスツールを使ってもらっています。

ミニレッスンの活動がどういうことかということなんですけれども、2つのポイントがありまして、教員の役割を見直す、そして学びを捉え直すということを意識しています。こういう視点からCLEミッションの達成を目指しています。具体的には先生が授業でカバーできないものを補うため、学生たちが自分たちでテーマを決めて、漢字語彙を集めることで、基礎知識を勉強して、その用例を作って応用するということをしています。そして会話では実際の自分のこれまでの経験とかあるいは想定される場面というのを想像して、学びと現実世界を統合するというを行っています。テーマ設定やグループメンバーと協働するという面では人間の特性を学んでいるということ、そしてミニレッスンはクラスで7つとか8つとかのテーマがあるので、そういったミニレッスンを受けることによって新たな関心を見つけて提供された教材で学ぶことができます。また、コーパスツールを使うことによって学び方を学ぶということをしています。こちらが学習者の振りかえりですが、時間がないので省略しますが、こんな活動をして私のコースではCLEミッションの達成を目指しています。今後に向けてなんですけれども、アイデアがありまして、学習者自身、教室の中でミニレッスンをしているんですけれども、教室の外でオープンなスペースでミニレッスンを提供する、そういうラーニングコミュニティみたいなものが作れないかというふうに考えています。また、のちほどの話とも関わりますけれども、自律的な学びを促進するために、AIとの共存が欠かせないので、どのように生かしていくかというのを考えていきたいなと思っています。すみません、最後駆け足になりましたが、以上になります。

近藤雪絵先生

皆さんこんにちは。BKCの英語教育チームです。よろしくお願いいたします。私近藤雪絵と山下美朋さんは英語教育プログラム、木村修平さんは言語情報コミュニケーションコースの修了生です。私達3人はBKCの生命科学部と薬学部で、プロジェクト発信型プログラムを実施しております。こちらのプログラムは、英語でProject-based English Program、頭文字をとってPEPと私たちの方では呼んでおります。

このプログラムでは、自分の興味関心に基づくプロジェクトを学生自身が立ち上げて、その成果を英語で発信していき、そうすることによって英語の運用能力、そして発信力を育てていきます。2008年度から立命館大学に導入されておりまして、現在では先ほど申し上げた2つの学部に加え、スポーツ健康科学部と総合心理学部の方でも実施されています。これは正課のPBL環境型の授業であるとともに、BYOD (Bring Your Own Device) のポリシーを採用しており、ICTをフル活用しています。そしてこの授業クリップの一番上の写真が典型的な授業風景なんですけれども、学生たちが自分のコンピューターを持ってきて、自由に検索や発信を行ったり、また時にはこのように大きな舞台上で学生も発表したりすることもあります。こちらは私が所属する薬学部のカリキュラムの例で、1回生から5回生まで載せております。6回生は国家試験に向けて勉強する年なんですけれども、注目していただきたいのは英語の授業がずっと走っていることです。またこのピンクが英語教員、そしてブルーが専門教員と専門研究員なんですけれども、1回生、2回生までは英語教員で授業を実施しているんですが、3回生になってからは英語授業が専門外国語という位置付けになりまして、英語教員と専門教員のコラボレーションで行っています。そして、薬学部の事例では4回生は英語科目が専門科目にシフトしていきますので、この専門の先生の役割というのがすごく大きくなっていきます。修士に至ってもそうですね。その中でも英語教員、専門教員が密に連携をしているというのが1つのポイントとなっています。こちらが授業クリップですね。例えば薬学部の場合ですと、プロフェッショナルスキルを育てていくことが大切になり、こちらの写真のように模擬薬局を使ってちょっとした実習を行うこともあります。また、学生は授業でプロジェクトを行いますが、このテーマを学生自身が選ぶということを非常に大切にしています。何か教科書からテーマを持ってくるのではなく、学生が日常の社会から自分で関心を持つもの、問題意識を持つものを追求していく。それが1回生のうちは趣味とか出身地とかになるわけなんですけれども、高学年になっていくと、どんどん自分の専門分野と絡んでいくというのが理想的にしている形です。そして機械翻訳やAIなどの最新のテクノロジーを拒否せず、とにかく仲良くなっていくということが重要になっていきます。ですので、プログラム自体が時代に応じて絶えず変わっていく、そういったところも大きな特徴でございます。先ほど申し上げたように専門教員とのコラボレーションも多数行われており、私たち英語教員同士のコラボレーションも密に行っています。それは英語教員各自もプロフェッショナルでありますので、それぞれの得意分野も興味関心も違うんです。そういったことも大切にしながら、横のつながりを持っています。テクノロジーを活用しても自分が誇りに持てるプロジェクトを自信を持って発信することを非常に大切にしています。

このプログラムについては詳しくこちらの方に書いてあるので、もし興味があれば、手に取っていただければ非常にうれしく思います。

木村修平先生

言語情報コミュニケーション2期生の木村でございます。私の方からは、我々が運営しておりますプログラムの PEP が見据えている 4 技能のことについてお話します。言語の能力というのは、「読む」「書く」「聞く」「話す」の 4 本柱が所与の前提のように捉えられているかのように思いますけれども、その前提を疑ってみるべきじゃないかというのが、PEP がたどり着いた知見であります。プロジェクト型授業である PEP に私自身 10 年以上関わっておりますが、言語能力を捉える別の視点もあり得るのではないかと。PEP で提唱しておりますのは、プロジェクトに関わる情報を調べる「リサーチ」、調べた情報をまとめる「オーサリング」、その情報に基づいて意見や評価を交換する「コラボレーション」、プロジェクトの進捗や成果を発信・表現する「アウトプット」という新しい 4 技能です。この新しい 4 技能では「読む」「書く」「聞く」「話す」が複合的に交錯したり複雑にオーバーラップします。調べて、まとめて、交流して、発表する。この新しい 4 技能は語学に限らないアカデミックなリテラシーです。大学によっては初年時教育の中に位置づけられていますし、まともな研究者であれば、普通に日々の仕事を通じてやっていることです。なんとかなれば、学士というのは科学者の卵ですから、その基本的なリテラシーを育成するのに英語の授業を使ったらいいじゃないかというのが PEP の考え方と言えます。英語という教科は、大学入学前に多くの学習者が既に小中高を通じて 6 年から 8 年は学んでいる既習言語です。であれば、大学の英語教育には何ができるのか。大学生を預かる我々の大学英語教員の責務は何か、PEP はその具体的な提案の 1 つと言えるでしょう。それぞれのスキルについてやや詳しく説明しますと、まずリサーチですね。リサーチには Google などの Web 検索や論文検索が含まれるのは当然として、機械翻訳や生成系 AI ツールの活用も視野に入ってくるでしょう。次にオーサリングについては、オフィス系のアプリでペーパーやスライドを作成することに加え、最近ですと動画編集などのメディア編集も入ってきます。コラボレーションは、大学では LMS を指すことが多かったわけですが、コロナ禍で ZOOM や Teams、Slack など様々なアプリが使われるようになりました。最後にアウトプットですが、論文やポスター、口頭発表というトラディショナルな成果発表の形態以外にも、YouTube や VR 空間にも表現の場は広がっています。PEP がこうした知見にたどりついたのは、ありがたいことに、立命館が豊かな ICT インフラを整備してくれているからとも言

えます。加えて PEP では、立命館大学主催の DX ピッチで予算をいただいたことで、新たなフロンティア開拓に野心的に取り組んでおります。今お話したような内容を 2 週間前に日経新聞に掲載していただきました。記事が掲載された日にちょうど常任理事会があり、私も出席したのですが、副総長や学部長、研究科長、多くの先生方から「読んだよ！」とお声がけをいただきました。他にも学内外から多数のフィードバックをいただきました。今まで論文や本を書いてきましたが、こんなに反響をいただいたの初めてでした。しかし残念ながら、同業者、つまり大学の英語教員からの反応はほとんどありませんでした。もちろん PEP メンバー除いてですけれども、これは何を意味しているのか。私は思うのですが、PEP が取り組んでいることは大学の英語教員の仕事を根本的に変えてしまうのだと思います。「読む」「書く」「聞く」「話す」という、言わば既存のフレームワークを PEP の新しい 4 技能は飛び越えてしまう。PEP は学生のアイデアがベースですから教科書もないですし、何が飛び出すかわからない。成績や評価も難しい。PEP 教員が顔を合わせればそんな議論ばかりです。もちろん PEP が大学英語教育の絶対的な最適解だと言うつもりはありませんし、本当に課題ばかりです。ですけれども、その課題は全て、誰も今まで手をつけてこなかった新たな研究の種とも言えるわけです。また、少子化で大学の存続が厳しくなっていく時代に、我々英語教員に何ができるのか、どう貢献できるのかを少なくとも PEP は真剣に考えていると思います。ですので、我々としましてはこういう話にワクワクしてくれるような方をぜひ積極的にリクルートしたいと思っております。本日も、もし現役で院生の方で興味あるよっていう方おられましたら、ぜひお声がけいただければと思う次第でございます。私からはひとまず以上です。

近藤雪絵先生

ではここからは学生の成果のショーケースを行いたいと思います。10 年ほど前の動画から見たいこうかなと思います。どんなことを学生がやってるのか、その興味関心を発信するといっても、どんなものなのか。

これは 2 回生がディベートの様子です。

<https://youtu.be/IZsWXzN3ils?si=BOWLxchpSPQjEHxq>

このような形で社会のニュースに応じて、動画の中では学生が“In this rapidly increasing information society…”と言ってましたけれども、オンラインで薬が買えることに対して問題

意識を持ち、それを題材にディベートしています。なぜこのように古い動画の例を出してきたかという、私たちはまだこれをやってるからなんですね。ですので、私達の実践が特に変わってるというわけではなく、同じようなことをずっとやっているんです。それを踏まえまして、次の動画は去年の同じ2回生の授業でどんなディスカッションしてるかという例です。

<https://youtu.be/VnsD5yDzapM?si=C-HQaFpsCmpTLuQk>

変わったところは、学生の発信スタイルにより幅が出ているということです。この動画で学生たちは自殺率の移り変わりをニュース形式で見せたりですとか、これは実はスタジオのグリーンバックの前で撮影した動画なんですけど、教卓をまるでテーブルのようにして、後ろでお母さんと息子のちょっと寸劇を挟んだりしています。彼らはハグをすることによる意識の変化についてディスカッションしていたんですけども、かなり表現の自由度が高まっています。ですので、昔と同じことをやりつつ、こういういろいろ面白いことも、テクノロジーによって組み込んでいけるということですね。

そして次は3回生の授業の例ですが、先ほど写真でもありました通り、一番最新のやり方では、このVRを使ったポスターセッションとかがあります。

https://youtu.be/CSLeos_wUdc?si=HzCLT19hz4KRbHqj

学生たちも最新のことをやっているというのでちょっと楽しさもある。もちろん難しいところもたくさんあります。例えば最初は音声がかまく配信できなかったとか。ただ今までできなかった3DモデルをVR空間の中に貼っていくであるとか、いろいろ楽しいことができました。ですので、決して昔のやり方を別に捨ててるわけではないんですけども、こういった新しいこともどんどん取り入れているというショーケースでした。

ちなみに一番最後に見ていただいたのは Junieur Project 1 という授業で、最後の英語の必修科目です。特にこれは専門教員とのコラボレーションによるものなんですけれども、ここで必修が終わっているというのはすごくいいタイミングだなと思います。ここからもっとやっていきたい人は、専門的なことを英語で発信することに繋がりますし、こういった国際学会で行うようなセッションを学生が体験できるといったところもあります。去年の例といたしましては、この写真に写っているロボットくんがポスターの間を走りまして、ロボットの裏に UCデービスの学生がいて、遠隔からディスカッションをしたんです。

<https://www.ritsumeai.ac.jp/news/detail/?id=3254>

こういったことも楽しく行いました。では更なる専門性を探求してということで、続きまして山下先生に願います。

山下美朋先生

みなさん、おはようございます。山下美朋です。私は2012年に卒業いたしました。子育てしながら研究科で学習したことが非常に懐かしく感じられます。私の方からはですね、さらなる専門性を追求してということで、高回生の授業の方について説明させていただきます。先ほども申しましたように、プロジェクトも3回生以上になりますと、科学の専門性が強くなりまして、英語教員だけでは内容精査できないということになってきます。そこで薬学部、そして生命科学部の専門の先生方に授業に入らせていただいて、内容について助言をいただくというところで、コラボレーションをしております。

こちらは薬学部の5回生の薬学専門英語演習の内容に対する担当の先生方ですね。そしてこちらは私が担当しております、大学院の選択科目、科学技術表現です。こちらでは、15回の授業の中の3回に生命科学部の4学科の先生方一人一人に出講していただいて、専門分野の英語で書かれた論文を紹介していただいたり、そしてまた最終週には学生が行っている研究の内容を英語で発表するんですけども、海外での口頭発表の模範版という形で先生方に英語で質問してもらったり、コメントを頂いたりということをしております。そういうことが成果となりまして、昨年度よりこのような[成果発信サイト](#)を設けております。こちらのスライドはまた皆様に公開されるということですので、ぜひご覧になっていただきたいと思っております。

こちらは薬学部・薬学研究科のものでして、4回生以上のものが入っています。非常に素晴らしいものになっていますので、ぜひご観覧ください。そして次に皆様もご関心が高いことだと思いますけれども、AIを用いた私たちPEPの授業ということでご紹介いたしますけれども、今英語教育だけでなく、この日本全国の教育会でAIを扱っていくのか扱っていかないのかという議論がずっと行われておりますけれども、私たちはいち早くAIを活用すべきだということで、英語教育に取り入れております。

このきっかけとなりましたのは、2022 年度学内競争予算、通称、教育開発 DX ピッチを獲得したことにございまして、現在授業の中では学生たちがこのような AI が搭載されたツールを使っております。機械翻訳やみらい翻訳ですとか、文章校正やフィードバック、つまり E データが入っている Turnitin。こちらは 2012 年より私たちが使っております、現在は立命館大学全学部に公開されております。また英語の発音矯正ができる ELSA スピークですとか ChatGPT ですね。こちらは授業に取り入れるだけではなく、ChatGPT を搭載したライティングツール transable といったものを開発しました。こちらについてはのちほどご紹介したいと思います。このような私たちの取り組みは、メディアで取り上げられておまして、こちらの PEP の 1 教員である山中先生ですけれども、いち早く授業の中で学生が書いた英文と、ChatGPT に書かせたものを比較するなどして、新聞などにも取り上げられましたし、ニュースでも取り上げられました。今やもう先生は飛ぶ鳥を落とす勢いで、日本中かけまわって講演なさっておりますので、お聞きになったこともあるかと思ひます。

特に AI を英語教育に入れるにあたりましては、ライティング指導への期待が高くなっていると思ひます。先ほどの稲田先生や寺嶋先生も自律的な学習というところを強調しておられましたけれども、私も同意でありまして、生成 AI の強みとしましては、膨大なデータ学習から適切な情報を引き出すことができるわけです。つまり学生は聞きたい文法事項ですとか、表現や語彙などを調べる辞書代わりに活用することができるわけです。ですので、これまで単語学習と言いましたら、単語帳を丸覚えするといった無味乾燥な学習というものとはもうなくなると思ひます。明らかに単語学習というものが変わります。ChatGPT に仲介するという単語で *intervene* そして *interfere* という単語があるんですけども、こちらの違いを聞いてみたところ、詳細を避けますけれども、非常に分かりやすい英語で、しかも具体的に例を示してですね、説明してくれているんですね。*Intervene* は状況を改善するために仲裁すること、そして *interfere* は介入することで状況が悪くなることだということがわかるようになっています。そして、先ほどの話にもありましたけれども、ChatGPT などの AI を使うことによって自動添削そして自動採点が可能になるところが着目されている点であります。特に文法項目そして語彙という点で、学生の書いたものを ChatGPT に添削させることによって、彼らは自分で自律的に書くようになることができる、修正することができるようになる。そういったことで私たち教員は、内容面ですとか、論理構成の面に着目してフィードバックを分けていくということが集中化させていくことができるようになるわけです。そして E データが信頼性そして妥当性の高さともに良いというふうに今言われてきております。ChatGPT においても自動評価の実践が行われておまして、こちら安定していると確実に使えている。つまり、生成 AI を利用することで、あえてそして最終的な添

削として評価に至るまで、自分自身で書いていく、まさに自律的学習を促進することができるようになるわけです。そこでこちら、私たちが理工学研究科の博士課程の学生と一緒に今公開しておりますが、開発しておりますライティング支援ツール transable を紹介したいと思うんですけれども、R-GIRO の中で発案され開発されました。こちらインターフェースでありますけれども、このエッセイを書くというところで学生は英文を書いています。そうしますと、こちら Grammarly が搭載されておりますので、学生は英語を書きながら修正することができます。そして途中で新たな表現を聞きたいですとか文法項目を確認したいということでしたら、こちら表現を調べる。こちらでは Chat GPT に聞くことができます。出来上がったエッセイを DeepL で日本語で確認するということができます。最終的に Chat GPT にプロンプトを入れ込んだ状況になっていきますけれども、こちら CEFR ですか GTEC とかの評価を受けて自分の書いたものが良くなっている過程を見ることができるというようにいたしました。これは実際、本年度春学期の薬学科創薬科学科一回生の 22 名のクラスで使わせてみたところ、3 回にわたって短い英語を書かせたんですね。最初は自分が書いたもの、そしてこの transable を使って修正させたもの、修正稿と比較したところ、3 回にわたってですけれども、初稿から修正稿の方が総語数、そして異なり語数ともに変化して良くなっている。つまり、複雑性そして流暢性が高くなっているという様子が見えました。また、GTEC の評価、そして CEFR の評価におきましても、少なからず、安定的に伸びているということが分かりました。学生にこちら transable を使わせた結果を聞いてみたんですけれども、便利であった機能はやはり文法チェック機能ですとか、ChatGTP に質問できる機能などが答えられておりまして、私達がまだ開発の途上であります評価の安定性については十分使えるのではないかと答える学生が半分以上おりました。また、transable を使い続けたいかという問いに対しては、ここ非常に興味深い点だと思うんですけれども、使い続けたいと答えた学生と同数で、使ってもいいけれども自分で書けるようになりたいと答えていました。つまりこういった便利な AI ツールを使いながらも彼らは英語力を伸ばしていきたい、自分でよくしていきたいという風に思っているということですね。みらい翻訳に関しましては、学生は AI 翻訳を使って生産した英語についても誇りや自信を持って発信できているということが確認されまして、自分が書いた英語のものと AI 翻訳を使っている場合とで比較した場合、評価が 100 点満点中 30 点ほど高まっておりまして、堂々とですね、発信できているという率が高くなっているということをご報告させていただきたいと思えます。ではここからは成果と展望ということで木村先生お願いします。

木村修平先生

もう時間がないので駆け足で、PEPで英語の能力が伸びているのかという話をさせていただきます。そもそもPEPがスタートした15年前と現在とを比べますと、新入生の英語レベルの初期値が違うということが言えると思います。TOEIC L&R IPスコアで70点近い差がある。つまり、いろいろとご批判はあろうかと思いますが、私は小中高、さらには塾・予備校で提供されている日本の英語教育はある程度の成果を上げていると考えています。では大学はどうか。PEPで英語力は伸びているのか？PEPの効果かどうか断言はできませんけれども、15年間、2学部でほぼ同じタイミングでスコアを採取してきましたが、ずっと伸び続けています。もしかしたら、PEP型の英語の授業はやればやるだけ伸びるのではないか。こうした点からも大学の英語教員は働き方を見直すべきなのかもしれません。つまり、1回生・2回生だけ英語が必修という時代は終わったのかもしれない。英語教員だけから構成される小さな集団が低回生だけを対象に仕事ができている、そんな悠長な時代は終わったのではないか。これは、一部の先進的な中学校や高校では実際に起きていることです。つまり、英語の教員が他の教科の先生方とコラボレーションして、探究型学習などを通じて発信力や表現力を高めていく。そのためにはAIなどのテクノロジーも英語運用能力の範疇にとらまえて、どんどん活用していこうという考え方は、これはLEISの皆さんには申し上げる必要もないでしょうが、人文系だからICTが苦手ですというようなことを言う場合ではないのではないかと。PEPは今ありがたいことにいろいろな機会をいただけて、注目もしていただけていますが、その強みはチームで働いているということです。ICTが苦手な人もいますが、では教員同士で助け合おうというチームワークがあります。いずれにしても、私ども3人が現在こうした立場で頑張らせてもらっているのは、もちろんLEISで学んだことが礎になっていることは間違いありません。我々としても、LEISの発展に今後も何かしら貢献できればと思う次第でございます。本日はどうもありがとうございました。

平田裕先生（司会）

ありがとうございました。ご発表くださった先生方、もう一度ご登壇をお願い致します。それぞれ大変興味深い、外国語教育に対するモチベーションを刺激され、学ぼうという意欲を刺激される、本当に勉強になるご発表ありがとうございました。続きまして総合討議ですが、普通は質疑応答が主となるところですが、教育実践の具体的なところに関して質疑応答をするとそれだけ時間がかかってしまいます。今回は言語研20周年記念企画なので、「教育から学びへ、これまでの外国語教育とこれから」というシンポジウムのタイトルに沿っ

て、まず先生方のお考えをお聞きしたいと思います。先生方のご発表を受けてこのスライドに示すように、討議のテーマを具体化、整理しました。ChatGPTを始め、生成系AIが人間社会を激変させるのかというタイミングにきていますが、外国語教育、学習に関して先生方の考えをお聞かせください。お聞きする順番は日本語教育、英語教育の区別はなく、言語研の先輩後輩、後輩から順番にということさせていただきます。寺嶋先生と木村先生は2期の同期ですけれども、真ん中に英語教育が固まるので、先に寺嶋先生にお願いいたします。それでは稲田先生お願い致します。

稲田栄一先生

この論点の一番にあります、変わっていく、また変えるべきところというところでは、私は先ほど発表させていただきました、作文を使った読解活動ということで、学生が作文を書くというところでのフィードバック、さきほどの山下先生の話でもありましたけれども、ChatGPTや生成AIを使って作文をブラッシュアップさせるっていうところで、教員の手を離れて学生側も自身の力でその手ごたえを感じる。作文を書いた前とフィードバックがあって修正したものの手ごたえを感じられるというところは、これは確実に変わっていくだろうということです。一方で、維持するべきところというより維持せざるを得ないのかなと思うんですが、私の活動において、まずそもそも学生が作文を書くのはなぜかと考えたときに、私の活動では友達やクラスメイトに読ませたいっていうことだったんですけど、作文というのはそもそも、自分で日記を書く場合もありますが、誰かに読んでもらうってのがすごく原動力になるかなと思うんですけど、この原動力は果たしてChatGPTに読ませたいから、生成AIに読ませたいから作文を書くというのは、原動力にはおそくなり得ないんじゃないかなっていうところで、やはり維持するものとしては、学生を動かす原動力として誰かに読んでもらいたいという力、これはやはり、人がそこにいるからというところは、ChatGPTがこれから発展しても維持されていくのかなと思います。もう一つですね。作文を自分でChatGPTのフィードバックをもとに書き直して修正した場合の自分の満足度っていうのはこれ確実に上がると思います。なぜなら、間違えが指摘されて、あるいはChatGPTに問いがあってその問いに答えたという満足感から、必ず学生の満足度があがると思います。つまり自己評価はあると思います。しかし、自分で書いた作文を自分で読む、自分で修正された満足感はあるんですけど、私の活動のように複数の学生が書いた作文を、ある学生が先生がいい作文を選んで欲しいって言うふうにしたんですよね。これは先生が選んだ作文は、何か先生が感じたものがあるんだろうな、それを知りたいって言うようなこ

とだったんです。これが、例えば ChatGPT や生成 AI に判断してもらって、A の作文がいいですってなったときに、果たして B さんは、ChatGPT が言ってるから自分の作文の方が良くないって言われたときに、果たしてそこは満足できるのかと考えると、判断というのは人の判断が必要な場合もあるんじゃないかなというところで、人間が見て心に感じるものっていうのは、今後 ChatGPT や生成 AI が発展した日には、その辺もうまく人間の評価っていうのが反映されるのかもしれないですけど、現状では人間が判断したというところにこの作文の書き手というのは感じるものがあるのかなというように考えています。以上です。

山下美朋先生

いろいろ考えることはあるんですけども、私は比較的学生が書いたものを指導することが非常に好きでして、そういった分野を研究の対象としているんですけども、確実にライティング、英作するっていう点に関しては、こういった便利な AI のツールを使っていくっていうことが当たり前になっていくだろうし、また証明されていくと思うんですね。先ほど私の箇所でも申しましたけれども、やはり事実的に変えていくっていう方向性に確実になっていくと思っています。しかし、私が今懸念しているのは、実際に翻訳ツールなどを使わせているんですけども、でてきたものをでてきたものの確からしさを判断できるかどうかというところなんですよ。確実にその学生の実力以上の英語が出てくるわけで、それを鵜呑みにしてしまわないように、実はこういうことを書きたかったんじゃないかな、ちょっと表現が違くなって判断できるような、そして少なからずその英文を見て、ここちょっと違うかなと思うような、そういった感覚っていうものはこれまでも持っているものだと思うんですね。そういう意味では、英語力をさらに鍛えていかなければならないし、大量に英語を読まなきゃいけないっていうことはあると思うんです。それとこういった AI に任せて英語を書いていくってことになった時にですね、もう型にあてはめて、大学院生でも論文をかいていくことができるんじゃないかっていうふうに思っているんですけども、そうなったときにこそ、コンテンツ、もうこれは皆さん思っていると思うんですけども、コンテンツ重視になってくると思います。ですから、大学院生であればやはり研究そのもの。いろいろな面で非常に面白いものであるですとか、あと作文をする際でしたら、ChatGPT などに書かせるのではなくて、ChatGPT にアイデアを聞くことはいいと思うんですけども、そこから自分が他の人たちに感動させられるような、共感を得るようなものっていうのは、やはり自分にしか書けない、そういったコンテンツにこだわってほしいと思っていますし、そういっ

た指導をしたいと思っています。やはり自分にしか書けないものでこそ、1人が共感する、感動する文章が書けるっていうふうに思うわけです。以上です。

近藤雪絵先生

ありがとうございます。変わっていくこととその中で維持すべきところ。これはあえて私自身が所属する英語プログラムにダメ出しをするような形で回答したいんですけども、一つは英語教育という枠組み自体がやっぱり変わっていかないといけないと思います。例えば先ほどから専門教員とのコラボレーションって言っていましたが、それをどうやっているかという、15回中5回の授業に専門の先生に英語の教室に来てもらうっていう形です。これがはっきり言って、古いと思います。旧時代の Team Teaching とも言えます。なぜそのように思うようになったかという、4回生、5回生そして院生の英語教育を担当するようになったからです。これまで英語授業では、毎年異なる専門の先生に来ていただき、フィードバックをいただいているのですが、学生が自分の研究成果であるとか、本当の興味関心を発信するときに、そんな枠組みの中だけでできないはずなんです。今回山下先生からも発表があった「成果発信サイト」を作るときに、私達は結構苦労しました。というのはそんな授業の中だけでの枠組みでできず、もっと大きく学部外での共同研究者との関わりや、著作権も含め、考えていかないといけないことがたくさんあるからです。その成果が一体誰の著作なのかということも考えなければならないのです。大学のものなのか研究室のものなのか、それとも自分のものなのかということですね。そういった面では、この英語授業の中に先生が来ていただくという枠にはまるというのが古い。ですので、英語教育というものは実は枠がないものになっていくような気がします。そのことによって実はどこにでも存在するものになるのではないのでしょうか。また、ツールに関しても、一つ自分たちのプログラムにダメ出しをしたいところといえば、例えば Turnitin は有料のサービスなんです。大学では使っているけれども、それを学生が社会にでてから使うかという、使わないですよ。社会人になってから「私はいつも Turnitin を使って英語を書いています」という人いないですよ。実際学生も本当に Turnitin を使いたいのかという、実は誰でもぱっと使える ChatGPT で書いてしまいたいところがあるかもしれません。だったら本当に社会で現在使われているものをやっぱり授業の中でもどんどん使っていけないんじゃないかなと思います。ただ、教育用に整備されたものは効果の検証も進んでいますし、使い勝手もいいし、それは学習器具とか教具として残っていくものだと思います。一方で、大学に在る間だけ使えるものをずっと使わせてるといったことをなくしていく必要があるかなと思

います。そして維持すべきところなんですけれども、これは APU のご発表にあった自律学習とか言語運用、異文化間のコミュニケーションの中で他者からの気づきと自身の省察だと思います。これって本当にプロジェクト型の英語でもすごく大切にしていることでもあります。学生によく聞かれます。なんでそんなに発信ばかりしないといけないのかと。それは、自分では自分自身が見えないからなんです。自分を見ようとしても絶対見ることができない。たとえ鏡を見たってそれは反射を見ているだけにすぎない。ということは、自分のコンテンツを発信して、それを本当に自分で見るためには反応を見ていくしかない。その機会を増やすためにはいろんな発信をしていかないといけないです。もちろん論文で発信できたらいんですけど、友達と話すとか発表するとか、いろんな方法があります。ディスカッションとか。また、ここは AI が活用できるところでもあると思います。なぜなら AI に聞くことで、フィードバックが返ってくるからです。ただ AI だけでできないのは自身の省察です。私達は、多分昔から自分自身を検索するという事は、ずっとやっていたと思うんですけども、それをしなくなったらもう絶対駄目です。ですので、自分自身の省察、自分自身を検索していくっていうところは、絶対にどんなテクノロジーがあってもやっていかないといけないことじゃないかなと思っています。

寺嶋弘道先生

まず、最初に自分の意見を述べる前に、私が感じている社会的な背景がありますので、それを触れておきたいと思います。まず一つ目なんですけれども、言語養育が社会でどのように貢献できるのかという意義が問われ始めているのかなというふうに感じています。ある新聞で読んだんですけど、ニューヨーク大学の研究者の方が、ChatGPT が影響を与える職業・産業として、テレマーケターの次に言語教員があげられていました。私達もですね、ChatGPT 去年の 11 月に公開されて、前セメスターに、何度も ChatGPT の扱いをどうするかっていうことを議論したり、ワークショップしたりしていました。言語教員の中ではインパクトがある出来事だったんですけども、今後は言語教員以外の方から、一体言語教育って何をやっているのかっていうのが問われる時代になっていくんじゃないかなと思って、私達言語教員自身が学内・社会に存在意義みたいなものを示していく必要があるだろうというふうにまず感じています。もう一つは、多くの教育機関、APU もそうなんですけど、AI の活用というのを禁止しているわけではなくて、認めていて、学習者も実際に使い始めています。APU の場合は禁止しないで、AI のデメリットを把握しつつ、適切に活用してほしいと

いうメッセージを発信しています。もちろん、言語教育もそういうコンテキストの中で、何ができるかっていうことを考えてなければならないですし、今後ますます学習者がAIを使うということは当たり前になる時代が来るんじゃないかなと考えています。最後は多様なAIの登場と発展です。例えば先日ニュースになってたんですけど、ChatGPTを公開したオープンAIが、GPTsっていうものを公開したそうです。これはChatGPTを自分好みに変えていけるような、そういうものなんですけれども、今後そういったいろいろな特徴を持ったChatGPT、個性を持ったChatGPTっていうのが出てくる可能性があります。ChatGPTだけでいろいろなAIというのも発展していこうというふうに考えています。こういう背景を考えた場合、変わっていくところっていうのは、文章生成AIと私は呼んでるんですけど、文章生成AIの活用リテラシーっていうものを教えて、言語教員の役割とか、AIを扱う意義というのを示していかなければいけないかなというふうに思っています。AIリテラシーという言葉が先行研究の中にあるんですけど、私自身イメージしているその文章生成AI活用リテラシーなんですけど、AIと効果的にコミュニケーションを行って、そして適切に活用できる能力です。私のイメージとしてはまずはAIを活用するためには、テクノロジーそのものの仕組み、ChatGPTがどういうふうにできているのか、どうしてこういうふうな回答が出てくるのかという、テクノロジーについての理解がやはり必要だと思います。そして人間の産出と、AIの産出が何が違うかとか、AIっていうのはどんな時に使うべきなのかという使う状況の判断とか、AIとの効果的なコミュニケーション、出力結果を解釈してそれを批判的に評価するとか、倫理的な問題の理解とか、どのように遵守するか。あと社会の中で実際にAIがどのように活用されているか。未来はどうなっていくかっていう想像。そういったものがこのリテラシーの中に含まれるかなと私は考えています。文章生成AIを効果的に活用するためには、やっぱり人間が産出するものとAIの出力するもの、この違いを理解する必要がありますし、AIと効果的なコミュニケーションとか、AIが出した産出を批判的に判断・評価する力が必要になるので、こういったところで言語教員の役割というのが見出せるのかなというふうに思っています。他にもAIのテクノロジーについてとか、AIの倫理問題とか、AIの現状とか将来どうなるか、みたいなものも、言語の授業の中で扱えることっていっぱいありそうだなと私は考えています。個人的に今すごくAIを私も注目しているんですけど、今私が活用している方法っていうのは、アイデアの提供、例えばこういうものについて幅広く話題を提供してくださいみたいなアイデアの提供と、あとChatGPTは稲田先生と一緒に研究したんですけど、単に間違いを教えてくださいだけではなくて、書いた人に深く問うような質問をしてくださいというような使い方です。外と鋭い質問をChatGPTがしてきて、自分が書いたものについて足りない部分とかを問われることで、もっとこういうことを書いた方がいいかなみたいなことを学習者が気付くっていうことがわか

りましたので、そういった使い方を今後進めていきたいなと個人的に思っています。こうした具体的な使い方も含めて、AI リテラシーの養成というのは私達も先ほど紹介した、学び方を学ぶっていうところ繋がってくるかなというふうに思っていますが、ただ、まだ具体的にどうやってAI リテラシーを育てていくかみたいところは、まだ具体的なところは見えていないので、今後そういったところをもう少し皆さんと議論したり、あるいは研究していかないといけないかなと思っています。最後に維持することなんですけど、先ほど確からしさとか自分らしさというお話があったんですけど、やはり私も DeepL とかよく使ったりするんですけど、最終的には自分の言語知識とか、構文力とか、表現力、そういったものがどうしても必要になるかなと思っていて、どんなに精度が上がったとしても、それを出す責任とか最終責任のその人が判断する力っていうのが必要で、そういった基礎的な力の教育っていうのはこれからもなくならないんじゃないかなというふうに考えています。

木村修平先生

諸先生方がおっしゃる通りかと存じます。特に寺嶋先生が今おっしゃった、言語に関わる教員が自分たちの存在意義をどう社会にアピールしていくのかっていうのは本当にシリアスな問題になってくるかと思えます。2つ目のことについては、あえて憎まれ口を申しますと、今の大学英語教育業界に維持すべきものなんてあるのかなというのが私の正直な気持ちでございます。かなりの部分がアウトデイトし始めているんじゃないか。こうした危機感については、はっきり申し上げてかなり世代差や世代間格差があるのではと思います。ですので、大学の既存の形態の英語教育というものが維持されるべきだとは私はあまり思っておりません。もちろん PEP もカリキュラム上は英語の科目、語学の科目という位置付けにはなっていますが、PEP の教員同士でよく議論するのは「私たちが教えてるのははたして英語なのか？」ということです。教えている実感として、あまり英語の教員という感覚がないんです。ですので、PEP 以外の英語の先生方と意見や目線の隔たりがどんどん大きくなっていく、やっている仕事もう違うのではないかとすら思っています。加えて、これも寺嶋先生のおっしゃったことに通じると思いますが、テクノロジーの理解は今後のつぴきならないほど重要になってくると確信しています。私は LEIS の 2 期生ですが、当時は就職氷河期で行くところがなかった。英語はちょっと得意だったので消極的な選択の結果、進学したというのが実際です。そんなわけですから、入学後、初代研究科長の中村純作先生の授業で恥ずかしながら初めてコーパスというものを知った次第です。そして、中村先生の授業に鳥肌が立つほど感動しました。なるほど、テクノロジーを活用して、ネイティブと非ネイティブの

言語能力差を埋めるという発想があるのか、しかもそれがプレーンテキストで行えるのかと。衝撃的で新鮮な驚きでしたし、夢中になりました。今 ChatGPT とかの生成系 AI のものになっている LLM（大規模言語モデル）、さらにそのアルゴリズムであるトランスフォーマー、これらはコーパス言語学の、かなり規模が大きくなっていますが延長線上にあるものです。私はいま生成 AI を大いに仕事に活用しておりますが、LEIS で学んだおかげでテクノロジーをブラックボックスと見なさず使いこなしているのだろうと痛感しています。

平田裕先生

ありがとうございました。時間も近づいていますので、相互でのディスカッションにはなりませんけども、ここでまとめに入りたいと思います。迂闊なことを言うと木村先生に説教されるような気がするのですが、、、。このシンポジウムの司会をすることで気が付いたんですけども、僕が大学を卒業するくらいの時からパソコンの普及で社会・教育が変わったと思います。その後インターネットの普及で社会・教育が変わったと思います。その後、ノートパソコンの普及で社会・教育が変わったと思います。スマホの普及でこれもかなり変わりました。このコロナ禍で Zoom をはじめとする、オンラインコミュニケーションシステムの普及で社会・教育が変わってきたと思います。この 30 年ぐらいのことですけども、本当にあの刺激的なというか、ドラマティックな時代だと思います。そして今社会が、教育界が、生成系 AI を身近なものとして実装し始めたというような状況だと思います。本日ご発表いただいた先生方、言語研の修了生の方々に、教育現場での実践から生成系 AI の活用とこれからの外国語教育・学習という大局に渡る範囲でお話しただけなのは、言語研の 20 周年企画として本当にふさわしい内容だったと思います。流されるのではなく、主体的に・能動的に取り組むということが大事だということを再認識させていただきました。本日 20 周年企画のすぐ後に、言語研の同窓会企画の講演会が予定されています。教育現場や社会と大学・大学院の間での知識・スキルの還流ということで、これからの言語研のあり方を考える上でも非常に示唆に富むシンポジウムになったと思います。本日ご発表くださった先生方、本当にありがとうございました。